

四天王の像（木造四天王立像） 国宝

四天王は、仏教の宇宙論において私たちの世界の中心にあるとされる山、須弥山の四方を守っている守護神である。持国天は東を、増長天は南を、広目天は西を、多聞天は北を守っている。これらの素晴らしい像は、寄木造りでつくられ、非常に写実的で、鎧の飾りに刻まれた顔など、ディテールも細かい。12世紀の日本の仏教彫刻の最高傑作である。

持国天は左手に剣を持ち、右手に宝珠を持っている。増長天は左手に剣を、右手に三鈷の槍を持っている。広目天は左手に三鈷の槍、右手に紐を持っている。多聞天は左手に三鈷の槍、右手にミニチュアの塔を持っている。4体の像すべてが足で悪鬼を踏みつけており、炎に包まれた光輪の前に立っている。この威圧的で荘厳な外見は、この時代には新しいものであった力強さを示しているが、全体的にふくらんだ重みのある胴体部分は、12世紀の後半の奈良地域において一般的であった彫刻のスタイルを反映している。鎧やポーズの多彩さは、この4体を視覚的に印象的に、そしてバランスの取れたものとしている。

4つの像はすべて、鎌倉時代（1185～1333年）の初期の仏師、康慶（1175～1200年に活躍）によってつくられた。記録によると、これらの像の製作は1189年から1193年の間に行われ、康慶の弟である実眼が指揮したという。2018年に中金堂が完成するまでは南円堂に祀られていた。